

# 十字路

21世紀になって花開いた経済のグローバル化は、ヒト・モノ・カネの効率的な配置や交易と投資の拡大を通じて世界に多くの富をもたらした。1980～90年代に年率3・1%だった世界経済成長率は2000～19年では同3・7%に高まった。情報技術の革新は瞬く間に広がり、先進国と新興国との間の経済格差は相当縮小した。

しかし、我々は試練に立たされている。各国が自国の利益を第一に考えるのは昔から変わらないが、グローバル化に脆弱な階層や産業がポピュ

## 不確かさに警戒すべき2026年度

リズム政治や保護主義を各地で加速させ、合理的なサプライチェーンが寸断されがちだ。10年代半ば以降は、ロシアによるクリミア併合やウクライナ侵略、香港の「一国二制度」の形骸化、米国による国際協調を軽視した政策など、地球規模の課題を解決する上で不可欠な多国間主義の要素を欠く事態が相次ぐ。

世界は平和からも遠ざかっている。オスロ国際平和研究所によれば、24年時点で国家による紛争が36カ国で61件起きており、1946年以降で最多だ。うち19件は、2010年代半ば以降に急増した第三国が関与する「国際化した内戦」で、そうでない内戦と比べ死者数が格段に多い。

約200ある国・地域について生活水準（購買力平価換算の人口1人当たり国内総生産＝GDP）に関するジニ係数（0に近いほど平等）を試算したところ、05年の0・55から15年には0・47へと格差縮小がみられた。だが25年は0・45と、同じ10年間でも改善幅が4分の1にとどまる。所得を生み出す世界経済の力が低下している。

足元では、中東を含む西アジア全体を巻き込んだ紛争などを要因とするインフレ懸念が急速に膨らむ。不安ともろさが国内外に漂っており、これまででない不確かさに向き合う新年度となりそうだ。

（大和総研 常務取締役  
調査本部長 鈴木準）